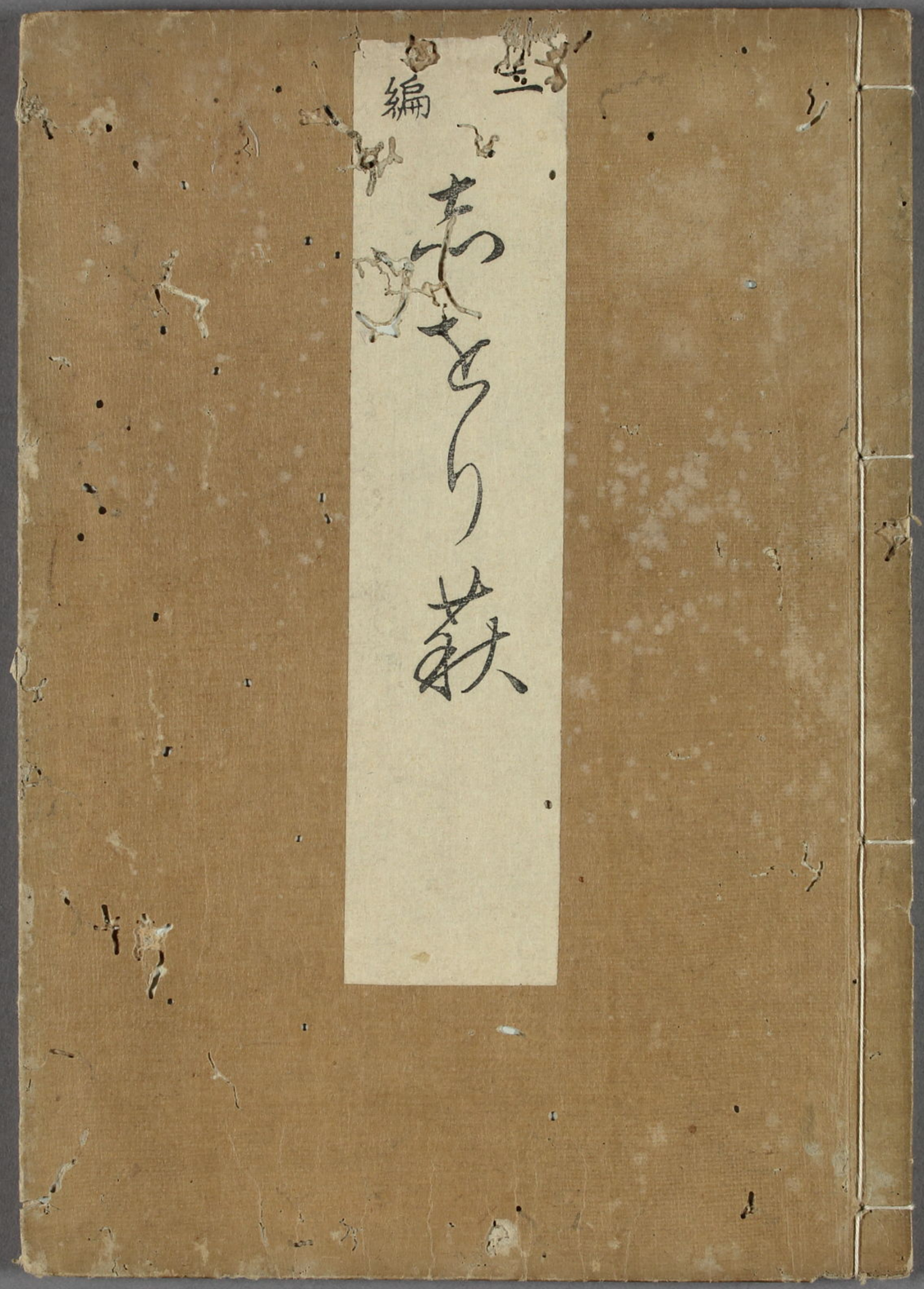
一編
おもとり萩

二編　志とうゝ早秋

杉上下蹟越ゆまて東成庵主の
ぞしめま携ひ筆中よ頭を皺し
姑射子秋の雪に喃くゝの誰り
よくそ此寛を志て寛に利をもて
しるみゝゝ呼不ま利んや詩乎
連俳ともに四海の變化にわたる吻
携への翁人や甚ゝゝて尾濃
三吾の諸生ば指揮し出さるも

[illegible]を踏を別むとけ[illegible]いこ河玉
矢作の郷より[illegible]来たる人まち
変化かく[illegible]
むうん明生い[illegible]
[illegible]師いへるわすれ[illegible]の
一篇よりの思ひ[illegible]
越後のる川[illegible]
[illegible]稲[illegible]越の長演[illegible]
かすも秋い[illegible]
袖をかく記月の玉江乃[illegible]

[illegible]この[illegible]
[illegible]尺の[illegible]
[illegible]道の[illegible]
門生おかく[illegible]
出[illegible]
[illegible]
[illegible]月十八日小[illegible]

明保七年庚寅　　竹也

三陌園塚下

武江

古義の節はむし[illegible]
[illegible]尾の晩蓋ゟ
夏初り時ハ東[illegible]風の
[illegible]

太無坊　秋風

[illegible]
[illegible]
[illegible]入て裸のかもはまて　晩蓋

[illegible]　[illegible]

門ちうひよハ心ゐる　[illegible]
いろくふ雲ゐのつ[illegible]月[illegible]照　青牛
[illegible]と秀乃[illegible]ゐ[illegible]　三木
[illegible]迄[illegible]出来[illegible]のさゝゐ[illegible]　[illegible]

[illegible]

世味菴　竹亦

和竹堂のあきらのもとにて雪所　岐喜

あら山風さむく吹て　同　岐喜

ふる雨の物好おもしろき夢語り　喜牛

乃びとくくと鼾をひくし　秋氏

川面の棹のしりあふ月の共　琴堂

浮く舟すん形庵丁　三禾

送別

友菊社家を出るや松きりて　喜牛

別くて越路よりせ汗拭ひ　琴堂

きぬ八月のうすぼりや袖の庸　三禾

赤く菜よそ遠や笠も夜のしめ　雪夜

道くの為紫やゆ揺て志ぶ拾　麦蓬

うぶ毛の雪ふ成恒し京川　魯舟

紫さんぐの上や漕ぐん源を秋　先樹

蓮華の咲堂に子を抱くと
武江に杖をとめて川岸の
雲よりも水鳥の合歓の
下臥しに行水の音小雨
ゆふ暮れ

帰れ山うぐいすの生ずる夏衣　京中斎　蓼太

蕨のたもとふ伝迷ひとと　咲堂

二親ゆ世ちと男泣の砂とと　吐自

市次おきへと行方ゆつき　代志

月ふ行くゆ空ちよ明るを　雷堂

とれとり蕨す駒のいつつ　山章

動化千に虚ま伝ちの孫ゆ　達丈

被ひそふ加ゆ　文来

おるを由に鶯古の巣ゆ小屋刀　知梧

しらゆく松ゆ胡白弦　何人

波物ふ孫

笠に見て花と雪の名残かな　何人

見渡の田植後うけて新蕨哉　於梶

月いさそ雪も和歌社乃時　文来

白川や新社見物も麦の飯　連文

友をこそ明日孫とも文字摺も　山幸

先さはふく嵐う紀の富やうち仲　霞堂

かりそんとうつそこの紙仲拵　戦歌

松よさめ合歓に森んとや笑まく　味月

きんういを添て松しを人
いつに成時晩景ふ笑しく　沢田奄

義よあふく恋ぬとれて柚の白し　小知

白川の麦乃秋風も吹ふ志あら　金洞

苗苔

きを拵と送くんと風ふ誘れ
こちらひ武江の風ふ
離亭成わけく

あちきる社　雅月を定むれ　晩景
初ちりぬ

武蔵餝栄

尾張の某馬足嬰兒東下りして奥羽の
志あるよしか今ゝ告ことにのりるゝやつれの
江都の中庵より小むらえ去るく橋月は
名くさえ武蔵野風雅に招ひて漸く卯月
乃末待ちをうちし布袋庵に至り七と世の
再会を語て松蔭の情をむすぶ

布袋庵　柳几

菜畑りしさわ侍しい起て深くも好す　柳几

雅をし景もさゝ侍をとる　暁台

水桶に施りい啼鳥成ゆきまそ　兎陵

くるゝい声に所麻あり　篁雨

月くまなき月から月と雲　雄山

降て涌く侍江戸鮭の初来　民石

門出成節句に一人川合皆　素牛

羽繕ても枯ハさきぬ春鶯　其苗

ぬ達掛に蝶飛ゆく風呂のみち　東甫

繋とらるゝ川鯨とかりり川　菫二

世の中ハ人々本を立て添して　翠兄

[illegible]に如て洗濯冬花
馬さん庭もせゝ[illegible]月のそら　味翠
かをうに律をすゝる物三　笛　麦挂
一門ハ都の秋ゝ[illegible]　杉夕
看古一賣て仕[illegible]女哀　鏡中
都ハ[illegible]山　桜[illegible]　祇道
[illegible]ひ[illegible]　新[illegible]　素川

江[illegible]

かハゝの声や清[illegible]て　新　乙　鏡臺
又[illegible]の孫芋ハ初松魚
風雨砂石を忘れ電光
眼[illegible]入る[illegible]本の冷
[illegible]や少か上と[illegible]おとハ[illegible]

奥州風流おくのひやうつ
数十歩見送て歩こる

祝いきれ雲白のこゝ葛四ら〳〵時　柳九

下野国日光

神祖宮納

鳴り響き国小雷ちかき雨　晩臺

馬繋山

見せうぶを揺らつゝしく裏のゆき

江戸にて

かハゝゝの声や清き歩て　舞　乞　晩臺

又ゝゝゝの蔭見ハ初松魚

風雨砂石を忘れ電光

眼に入る半本の吟

時雨や多の上とゝ松ハ

奥社見源おもひやりつ
移十余丈造り出す

霧いきおひ嶽白の二荒山入時　梅几

下野國日光
神祖奉納

鶴も照出闇小雲ちなむ朝鐘　曉臺

忌禁山

見けふ水を梅にうつし暮の雪

雨日華厳瀧

雨晴出て雲に来ちかし瀧千丈
水寸替ふく

響を揺る瀧之小蕨の唐紫ちる

殺生石

那須山なる此石は中に
埋てあさうちくねとこもあらり
毒気猶ふせる蟻蟋の影ひ
うかよふものゝ息絶す

露ぬえて何に心入る　結緯乃みち

陸奥

白川

白川のせゝらぎ一筋の古路を、
なほひうきゝとはるゝ世はなほ
向へらさくちせゝらぎて何といちく
ちうゝあり　数人衣を潔く冠装
西たときく一囊を脇し　荊蘇
をきゝひて拙ちくむ孤負の
北肺　さて扇一本を戒詠をとく
の〻飛ゝとしてつゝまる

信濃郡　板垣

白川を渡る扇の切月きゝ　蛟蟲

まよひたうへす袖の檣　呑溟

新法師の舟とりハ紀ゝ俤いて　吐虹

備後国ゝおの水もかゝ　二流

九ゝ秋室つゝふ降て月　紫雅

万稿と歌稿の写社独芝　南枝

行史山　　日西

田面の西亀山越

[illegible]行首湖上乃

伴以戸月[illegible]

[illegible]

水源し清水中の高野山　[illegible]

蓑を[illegible]

[illegible]の世と反橋の[illegible]　之保

又[illegible]　有泉

内佛の菊きんとふ湖[illegible]　一[illegible]

[illegible]の[illegible]　[illegible]古

文字摺　　伊達郡　桑折

高みなるよりいかすまし
ぬと摺ゆてあふ人川を渡る

羽鮎やの人新うゑ水の淀
后のおまてうゑ中ようゑ川ぬす
わうに四まのおまれたりとを

文字摺やうゑふ心ぬ友衣　吟雪

第蕪（ムヤ）うゑすの山信　回車
代玉ゑ馬ようゑ乃矣ゑへて　豆苗
ゑ所も仏くうゑ回孫　剥牛
場筆戸ようゑ入て仙茶瓶　卜而
ゑうゑ八馬静南ようゑふ　十虎

葛松原

笠田郡　大河原

芭蕉の居ハ山陰にむきひ[illegible]
うとゝ乃えて高く孤[illegible]とゝ[illegible]
らつと西上人の泪うも[illegible]
ゆゝせの記ゝ[illegible]
当流地人の谷ゝ[illegible]
松原ゝ[illegible]
[illegible]門[illegible]須せく[illegible]
ゝつゝ源樹流[illegible]を表ふ[illegible]
ゝふ葛ゝ[illegible]

宮ゝ[illegible]ゝ花の入湯や松原ゝ　吐蕉

ゝを[illegible]ゝ葛[illegible]　芦中

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　柳美

[illegible]の[illegible]　也寥

[illegible]の[illegible]の[illegible]　加生

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]　柳風

伊豆塔ヶ

山茶屋の洞を抱て一時
茶屋と欲すと以へる地形伏
庵はと煙雨の間うて
夕陽を望む高い鳥哉と
めて頭を垂る

福嶋

ちらちらして伊豆はなれ

雲雀

ちらちらの山元として伊豆はなれ
ちらちらに鳴くうへ田長哉　蕉風
ちらちらに鳴かと拔の猫うて　捷江
雲の中を和歌を延ばしめ　夕芝
ちらちらは堀に加ふる乃松　蕉翁
柚うて一うの面白哉如　左溪

武蔵国

石原邸　山石沼

この松を古記とくらしも
ちひはまりて居るもおもひ
ふきしよりあらつの　蒼鞠
二幹より立つ小て角をもや
いなて一本とふ居くも
あるか

松陰や居ちよつ小て下源氏　晩菊

屋よのきてもつ居す墨　伏籠
あり紙世外中と源氏の幻小　旦水
爲子蒼社重つるく　素粒
高かく集ひ月の畠和　成元
郭を之星退きて
とび行く　為文

道祖神　　日　　塙田

この神よりまもるわざとして
悪霊を拒ぎとどめあつまる不
幸をもって命を捨てる世人の身を
深く祈ることを教えられて
故風と呼ぶほうる半義の源泊
なを乃数ちゆはたらひ乃　　まもは

友菊を祭りて命を捨てる　　暁堂

梯子をもってはしの笠踏　　林尼

高人はなるを知恵を学ぶ　　生木

軍を小しく舞いの踊り　　荘木

貴妃を身を行く行く思　　金木

地を得ひよ高のの古蹴　　九江

寶方墳

今

苔擦塚るゝ墓筐の落ハ尽よ
るそおへまあやし紅葉の背
を同し世の義を不歩年雁
うんなるつく義中初の古墳を
おす花と咲く一時をそ稀を
塚と化して寂ようへおもを人
その姿乃物ゝ物ゝ哀や此么
るくの墳まても生し世井此上を
意味世をもつ思ふ思をてなへハ
切つよ物のちゝ南しくハ嘆く

塚ちくハ有なし此月を君やさて　夢蝶

いくよ物し世井此みれ　栄山

藏京の賊ゝをいさを之弦て　完似

知りてあるる唱すとを　習風

松えて紅葉いふ芳此月　菊栄

夢写の塚を日本ゝ姑義　車書

仙臺冬至奄社中

日高く日を忘れて漕ぐ仙府
入て茶雜炊とゝけいやそ人の住す
有り佐保を志ひ遠を彩て
けゝめて拙の碧ゝれん地ゝて世ゝ
ゝ二諸や拾ゝ破ふとゝへる清し
おゝをゝ志ゝて連京の住さくよ
歌ゝ拾一日郊外へゝゝゝゝゝふ
田和ゝ里一馳ゝはゝしゝを
ゝ饒車島の地ゝ利

這ゝ拾ゝ和ゝ有ゝ賀ゝ国ゝ　晩臺

人新ゝ来ゝ里ゝ日ゝ　丈芝

高生源ゝ和ゝ住ゝ春ゝの清ゝく　東朝

月ハ見ゝけと南ゝつゝ　榮文

有明ゝ清ゝ海ゝ髮ひく小寧和　光尊

書ゝ波ゝ海ゝ春ゝ　朝子

高雄社　　月連

こまゝ　こうたをたゝせ木乃
下ハ面こひるよりくるとりく
詠歌のとゝ　ゝ氏の花石
対象歌を出て吟交ル
こゝ　ゝの秋ハ短と
地よりくもいとゝ冷し

高雄や色ちるまゝ月の森　　世人喜

こうたをたゝせかさし雨滴　　菊史
幸駕も雲ふるのちの松ゆ　　等水
月よ雪乃つもるもみゝし　　去耕
男康明こ社山ものの行樂　　一芳
稲の実ふ戸を記雪源　　東地

清じう園

四月の末やゝ長いさかりうつしうつして一株乃
半繍亭舞楽の楼を
ちかくかりつゝひと日あるお人く
はるをきそこを清うのきをよ
むいうち畑るるゝまゝ柴義を
うきちり新心と家如し
後社今を見る人々のむしを
おふ影ひとるへし

桜園

桜園やむかしの記桜ちり　時雨

昔来て立ち寄いつく　朝　重嶋

九重めぐる月社あるぬ社稷を　右幸

あるこのちん第よむを桜る　松宗

ちるくと月の桜を雲の宴　東屏

春ハるものまぬ舞せうみを　橋乙

登雲山　　果非庵

直下に仙房の大路を隔ゝ
川霧ハ多く巌ゝに撞下の
雨さゝ集て如ふと知るべし
乱山美く篠竹之有り淋尚
を掃せり

山一方見みとゝ十万家　　吹雪

懸も如ゝす吟徳　芳角
深賞に聯ゝ脚ハ中よりて　芳泉
樹の表分も写ゝ遠れ　松雄
月ともに秋ゝ高ふ冴渡る　為夕
吟ゝ川若ゝ夜の泊　嵐来

霊碑

知定奄

詔曰去瑞夷玉果ヲ一百廿里ムの事を以て引
き一千余里之日和記京行帝の朝ニ日之見
玉の夷城征伐を参す日之見八ム日玉城ヲ
ゆて古田社在ニ日之見明神社在す黄耐
瑞夷ニ属すとう由一百廿里ムの也伏波明標
をきたあるを君氏や西戎奴ゑ氏小狄貢す
弘崇蓋玉城祝くに民雑ニ殺略ム所まえ
限くに杖とりて野中ニ蓋ヲ殿の改ちよう
まちひ出て家ニ到ゆ中くに碑文ニ玉果を
おりへそ捨ちるニ故里の情を思ひ涙ニ胸裁

表て眼亮ちうちう家愛の哀示羈旅の
くちう月角ちや

碑や古ちて裁去ちて蓋ヲ日　陵墓

ちうち色の此の此蓋ちと　松司
玖ちと映矢ち蘿矢ち　菜静
うう表ちよ倩蓋ち弁　ム之
つちれ戸杉ちあや雨の日　秋月
橘の庶柴ち　古芙

十岩サ宮　直菴

出柄の橋屋井手の懐ゆ
き例しも有うき夫れ橋
果てとうきてはとよ引きせ
うきゆへおきたるうう
初毋氏出うき一ものとれうと
笠うきたむ寸布の誠も
ものを

仕立かきす蔓一まとめ屋とり引　晩亭

輝よしうきて圓の松うゆ　布朴
八反帆屋計よ絡わげうく　布垢
下戸うき先へきみ出うく　文木
うつきと月きを家の孫　和文
去れひ車ようきう乃　壺泌

赤宮詩

赤の松山

袖巻いへて赤の山
ちとりて松のひとえ
墓就築くねとかり枝就
なるほどの駒の赤も紅
皆かくはとくうるしを

赤の松山

陸奥

恋ひしかや赤の山の松葉
袖と袖をもつ月の夜 陶家
一うちで鶏鳴と高てる方佩て 友雲
時ならぬれの湯漬追く 吉乃
背戸先よ月もうつ萩 菖乃
ひらひら稲のとれもちろう 方水

玉河　　心象

苔熟して面白く茫々
と霧きたる田舎と
玉川とを写ひとつ
多くはあるを玉川と
伊勢とを川に沿なる
伊勢の松橋みとをて刈

六月やみなかふ川をとつる　晩臺

沙丘城にて加藤名月　知昂

俗くと多き紀長の石碑　松都

月見への時に生出てを　竹葉

腰掛るよりて桂乃花の為　可竟

寧ろせるふ明神の坂　松屋

黒塚

武門

黒塚や帳内の人影追わるる　晴雲

義経櫃より泥くさるる　嘉角

沉くと釜の烹おと沿うせて　家牛

鞭ゆ丸横の皮ゆらるる　家潤

引きゆる月は口の赤さ　女　家萩

萩ゆ動て秋を見せる　家珠

奉積

月連

うれうくと家も又孫もあすもあす　晴雲

うれうくと家も又孫もあすもあす　家雛

うれうくと家も又孫もあすもあす　家英

うれうくと家も又孫もあすもあす　家滴

砧の側ゆ男ぎれかな　家嶺

蓋とつて箱ゆうれう萩も咲　家藻

ほうしゆう高の塔も春日

千賀浦和泊　高橋鄂　恒斧

日はさす言し一弱の無おろ
ちんと多賀乃浦はまちひて
漕出る船を接さ南よ顧ミハ
光杉高く清をの接ミ秋樹
新蕊ちく清ちもく安穏し

松ちち紫塩際ちし潮ちんと　晩基

塩ちあハ孤の退ふちとて　魚行
破ちあハ孤の退ふちとて　鳥星
徒義ち雪ハひちつふし　左亭
丈ハの白毫ちうす月竹無　谷傳
伊豫簾を捲ハ秋も来ぬ　雪融

塩竈明神法楽　月石

赤しほの川くいわしと神能　陸奥

むすぶ波よ清よ藻の玉　雨石

うつもれと姫姫の屑拾ひて　〃

ゆうつの扇拾ふやうに　〃

新あらたてなるくと義柳　〃

かえる孤の掘り遊ぶ　〃

登富士山大悲窟　月言楽

松源院蒼うとく富士山高むよ
ちうちもよ富士むふ

富士や芙蓉の見紙をうち表　陸奥

面影（アナヒ）の源しう掘ふ芙蓉　東雲

梓明よりもくかうる世を芙蓉　百馬

仕掛よ恵もめるたるかた　武山

音の光りを恵窟ひと　丈車

苔うう蒼る何りの院　祖音

緒絶橋

志田郡　吉川

をゝてゝ社名何の由縁とも
不[illegible]ひ伝えしか詳を
はゝしらす去とも[illegible]
小[illegible]橋も橋もて世
社寺人おりひをとゝまるる
かうた

紅葉の色やあらそふ長谷寺　時雨
雲も時雨小消る坂はしら　春雨
初雪は僅も雨よ紅つゝく　東菊
南蛮八先月きゝひ影ゆ　栄星
一条社家とゝ小月乃夜　桃星
紫梁内侍手猿の木伝ひ　篠車

婦塚

菅原氏　玄仲

當国半田ハはるかに行程
無ありし艶なる娘子一雙の玉珠
残せし其名つたへて婦なん
都へ登せけるに皆病ひ
にふしぬ帰り見るに野ハ
埋葬してもろの松を栽て妹
なりけるの嗣く都へ登せたふり
家に来りて亡婦の志を閑しが
驚きし婦塚りと婦墓也

暁臺

標とし婦塚と聞て松一本

都のつとに田唄ありとも　濤江

隠元社君ら茶摘も出かけて　棲江

大工も小以禮うけたり　鱗趾

讀いしは月に題面の菅いる記　石梅

荻は雪つむ松に芦の穂　不貴

高舘覽古　越前国　山口

命我義を惜しみ名を
子孫の跡清よとむるとのい
農夫詩る社業皆よ繼あ
せとる業をなりとき及ば
一揆や勇士逞兵義を忘して
多く一朝の亡る烟となる嗚呼
那て惜しくい因授り五百人

嶺と名る呼ぶ蒼赤之　北条氏

川ハ二流よめ名を源風　森林

玉よ節ハ自先ても詳ぶて　曲肱

現命ぶるハ已るまいす　菊山

件の紫二月もひそりに咲ぶ　筆之

あ南の流れよ頃の孤巒　星皓

松島

玉京ちりぢなる頃日もてふ
吹くるつゝ和歌をむ朝い
海原よ造りけて扶る九
ちうめ又ひ〻ぬ多ち
苔ふ岩く身よむふ紅い
保暫小所ありて人ぬ友
と思ふ探奇術紀の

八九を点ずして社岳陽もうく
もうつとうと主をつさうひまてる
今青の麓といふ所を少
ひを流ふるあり多ち〻我
うへるあり彩の左右て
主つて此川主ようよ〻

吹雪

青川吹雪や高山も
高あけて扶の雪

名歌

蒲サキ　祇川

[illegible]

江戸　玉蹴

[illegible]

魚別

送別

三別岡城　き人　椎車

[illegible]

石別八ヶ夕　乙智

武江切柳　天逢

雪ぬかや雪をとゝのへて咲ける

柳ちる柳

面白くふる雪の柳哉　旦雪

下ぬけ市　珠明

雪使て世を伐ぬる秋ぬけ風

炭うりのぬしっあるる斧ぬき

奥淺草　春秀

[illegible]

日光　斧久

[illegible]

[illegible]

[illegible]

作側い新竹や梅が香、　素
砂の霧む為原の壺矢哉　八市　瑞明
苔一刷と言ふ物や五月雨　清矢　露秀
末枯や言問くよ退し傍ひより
赤かりしも一日鶏頭哉　素堂
苔人うつむき星やうんこ雪　巨石

仙庵に暑日の水鶏ことめづらしくて

水鶏鳴てもてなしの主哉　陸奥

仙臺

紙子吹て言ふく新く小松哉　東鯉
ちくしやの日の暮とい四月哉　篁史
水音のはやしくや明くる　葉交
赤枯乃為ことのわり畢哉　朗子
川水の底も秋うつる夏の風　素耕
夢立て鳥のとまや夏の月　一芳
川秋や二夏くく業も暮を　古幸
月の出は明るい蛍よ枯果ん　光琴
赤蜻蛉ふ夢世の中と

日はうゝ雪さかゝる山の
上を照すまうゝ田植笠
脇境の妻又さひしく赤つゝ紅
葉柳やうゝ白く刈残す女客

延てゝ長き節あり紙子の色
多紙や足ゝ長き人い神まつり
かゝうゝに鶏を往ゝ雪はれ
晴こを出く小揺の音つ杜鵑

千義　知昴
等水　松石
拾石　の竟
丈芝　林柴

ゝ川のあたり田と呼て地名
呼て地、猿山ゝ山ゝ自
風も又ゝ長く吹ていつゝ月明
蓋ゝを水よおしむり杜若
ゝ菖ゝ動ゝ沢ゝ自沢ゝ
舟ゝゝ多ゝ柳ゝ乃ゝ書
垂ゝ青ゝ蓋ゝ蓋の想ゝ意
ゝ川雪ゝ赤ゝ長ゝ長ゝ
動ゝて花の逝ゝ二千葉ゝ
天十ゝ日の義ゝ人ん無ゝ

陶水　女
牧月　白之
古乃　方水
菖乃　太莫
友雲　茶静
徳司

炎暑不堪まして孤子の
心地やあらはいかに身を絶音
むさぶ涙の書もさぞ切なく　金馬

、

はるの我をもちやめたる暑さ　方吏
目墨へ乗入るものほとゝぎす　汀水
をしなやはるかぶるふ比ひとつ　松舟
夕ぐれや袖をうけしたる蓋　千賀浦　雨石

稲つまの社神をて寄る入るもの　岩沼　一歩
かつをしらぬ蛍の形や秋のこゝろ、　千巻

福嶋

姫とてゐる社子よりうの松の雑子　呑溟
捨るや青の形川乃捨篇　蒙雄
ぬまこて来る猫乃宮ものや長の面　吐虹
京稲の矢や二粒之稲と八重ゝ　二流
先祖の墓の苔ものをしらぬ　南捜

、

宗祇堂や新ぬる又一なるべ　程々

まろうかな傾む藤あり松の根　一袋
白雨や見ぬ川のいく流れ　二保
苔桜の紫くらせて月ぞうら　宵泉
川狩やけしめてをよ新茶　菊古
接待ひくや嵐のちり松根　伯之

煙草ぬやぬ世帯と思ひ　同車
新茶の初摘よりく清菓哉　豆苗

来れ

嘆凌喪兄四五日いとまの
赴ちんと接いと仮初の睦ひし
ちまを涙ぞと流ちとかまを
屋ちをを同しらして一盃を
経城ちうち帷中よはむりつき
金せしもやうて雙魚乃ちを
信てあて李凌う憶我
いちを

庵ちを於日を頼ちし　曉臺
玄庵ちを記

明味七庚寅秋七月

書林

尾州名古屋
風月堂孫助

奥州仙臺
山田屋留兵衛梓